刊行にあたって

勝福寺住職　釋知道

二〇一一年は親鸞聖人の七百五十回御遠忌の年でした。真宗大谷派では真宗本廟の御修復をするとともに、「今、いのちがあなたを生きている」というテーマを掲げ、教団あげての聞法が繰り広げられました。勝福寺でもそれに呼応して「親鸞聖人七百五十回御遠忌お待ち受け百日聴聞会」を行ったことです。

それに引き続いて、日豊教区・四日市別院でも「願われ、待たれている私を生きん！」というテーマのもと、四日市別院本堂の御修復をするとともに、教区をあげて親鸞聖人のみ教えを学んでまいりました。

そうした十余年にわたる歩みを受けて、私たちの中に、私たち勝福寺でも親鸞聖人の御遠忌をお勤めしようという気運が生まれてきました。

さて、それではどんな御遠忌にしたらいいのかと、みんなで話し合いを重ねていくなかで、「親鸞さま、なぜ、お念仏なの？ ― 出会おう、語ろう、今、ここで！ ―」という御遠忌テーマが生まれました。このテーマのもと二年間にわたって「お待ち受け聞法会」を行いましたが、詳しいことは第四章「特別法要」を見て下さい。

さて、はじめは「お待ち受け聞法会」だけを考えていたのですが、話し合いを進めるうちに御遠忌記念事業として、勝福寺史の編纂、本廟奉仕と聖跡巡拝、勝福寺運営の見直し、内陣荘厳の一部修復などもすることになりました。

勝福寺史の編纂については、御遠忌委員会の中に出来ていた広報部会が担当することになり、渡辺重昭さんを中心に作業を進めていくことになりました。

まず勝福寺の歴史についてですが、勝福寺には資料と言えるほどのものがほとんど残っていませんでした。ただし、勝福寺は四日市別院の前身である真勝寺の塔頭として歩んできた歴史があります。そこで、若くして渡辺家の歴史に精通している渡辺浩晃さんに、真勝寺、並びに真勝寺を開いた渡辺家の歴史を繙くかたちで勝福寺の歴史を書いていただきました。

父の代になってから、それも昭和四十六年に厳修した「親鸞聖人七百回御遠忌」からは、少しずつ資料らしきものが残っており、私たちの代になってからは「寺報」を出してきましたので一気に資料が増えました。

渡辺重昭さんはそれらを持ち帰り、丹念に調べていった結果、今度の本は勝福寺史にとどめず、戦後、勝福寺がたどってきた歩みの記録にしたらどうか、と提案して下さいました。こうして出来あがったのが『響流山勝福寺―その歴史と歩み―』です。ここまでに至りつく重昭さんのご苦労は並大抵のものではありません。あつく御礼を申し上げます。

ところで、渡辺重昭さんは数年前までは教育畑で働いていて、お寺に出入りするようになったのはつい最近のことです。そのため、活字となり写真となって残っていることの内容については実際に経験しておりません。それらについては当事者である私の方がよくわかりますので、重昭さんが編集して下さったものを今一度、私が編集し直しさせていただきました。

この本を作るにあたって多くの写真を見、原稿を読み直しました。そして、勝福寺に生まれてからのこの七十年という歳月は、実に多くの人と出会い、実に多くのことを楽しく実践し、そして多くの人とお別れした歳月であったことを思い知らされました。それとともに、時にオロオロとし時に後退しながらも、ともかくも歩み続けていくうちに、勝福寺がお念仏の教えに育まれて、心を開きあい、同朋が出会っていく僧伽らしきものになってきていたことに気づきました。今度の御遠忌もその僧伽の力で手作りの御遠忌にすることが出来たのだと思います。

最後になりましたが、時代は暴流のごとく激しく変化しています。人々の心も暮らしも、そしてそれに支えられてきたお寺のありようも劇的に変わっていくことでありましょう。そんな中にあっても、いやそんな中にあればこそなおさら、お念仏の教えを大切に大切にいただいていかねばならぬと思っています。

また、この本が、平成の時代にお念仏を中心に人々の集うお寺があったという、念仏の歴史の証人になることを願っています。

はじめに

勝福寺門徒総代長　向野　茂

令和元年という節目の年に勝福寺史を刊行することができ、私たち勝福寺門徒にとっては大きな喜びです。

「宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要」を、私たち勝福寺でもしようと発案してから役員会で討議を重ねる中で、「勝福寺の歴史については何もわかっていないなぁ」という意見がでました。

私たち今の役員には【寺の歴史を紐とき、諸先輩方の御苦労を知り、未来へと繋げていく責任がある】と受け止めて、渡辺重昭さんを中心に広報委員会が『響流山勝福寺ー その歴史と歩みー』を編纂することになりました。

私も編纂作業に関わることになったのですが、その中であらためて知らされたことは、実に数多くの方が、親鸞さまの教えをいただこうと勝福寺に集い、御縁を頂いておられることでした。また多方面にわたって活動が行われており、年配者だけでなく、子どもたちも大勢イベントに参加しています。

特筆すべきことは、「宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌お待ち受け百日聴聞会」と銘うって、百日聴聞会を実施したことでしょう。二〇〇九年一月十七日に第一回を起し、ご講師は酒井正知氏（円徳寺前住職・本願寺派）講題は「帰命無量寿如来」でした。そして第百回目が二〇一一年十一月二十六日に、元教学研究所所長の児玉暁洋先生をお招きして「南無阿弥陀仏と言う信心ー第十八願に乗托して第一願に生きるー」でした。実に二カ年と十一カ月、月に二回から四回の割合で土曜日の午後一時半から夕刻までお話をお聞きしました。その間の聴聞者は累計五三三八名になりました。

今回も二〇一八年一月から二〇一九年十月にかけて、「親鸞さま、なぜ、お念仏なの？」のテーマを掲げて、「響流山勝福寺 宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌 お待ち受け聞法会」を実施してきました。最初の十回は住職と坊守が、後の十回はご講師をお迎えして、ご法話を拝聴しました。

そして尚、特筆しておきたいことは、このたびの御遠忌では、親鸞聖人の七百五十回御遠忌に合わせて、親鸞聖人の伴侶でありました恵信尼さまの七百五十回御遠忌法要を厳修することです。

浄土真宗は住職と坊守の二人三脚で法義を相続してきましたのに、坊守に光が当てられることが少なかったように思います。このたび恵信尼さまの御遠忌を勤めるということは、在家仏教としての浄土真宗を慶讃することになろうかと思います。

当日は渡辺愛子先生に「親鸞聖人と共に歩まれた恵信尼さまー在家仏教を開くー」の講題で記念法話をして頂き、薩摩琵琶奏者・櫻井亞木子師に「花こぶしー恵信尼さまを憶うー」を演奏して頂きます。

最後になりましたが、数多くの諸活動に門徒のみならず多くの方々に御縁を頂きお力添えをして頂いていることに改めて深甚の感謝とお礼を申し上げます。